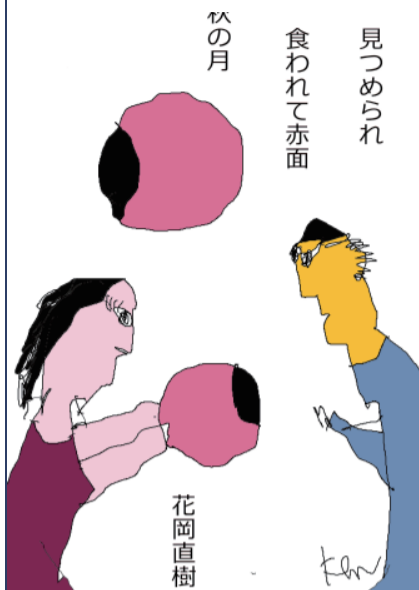


2022年12月

■今月の特選句



見つめられ食われて赤面秋の月

花岡直樹

十一月八日の皆既月食のことだね。太陽光の赤い光は波長が長く屈折して地球の影に入り込むためと聞いていたが、見つめられたためだったのか。



ご最頂の家を忘れず焼芋屋

竹下和宏

今や空前の焼芋ブームだが、昔は「い～しや～きいも～」と言いながら屋台をひいて売られていた。焼芋屋はどこで何本売れるかよく知っていた。



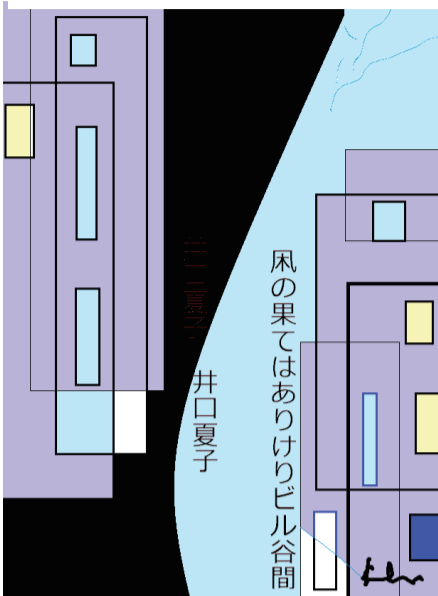
ヘアピンの指にヒヤリと冬に入る

桑田愛子

俳句は、季節の到来を実感をもって詠む文芸。ヘアピンが指にひやりとは、男性には体験できない実感である。愛子さんはそこにピンと来た。

■今月の特選句

2022年12月



風の果てはありけりビル谷間

井口夏子

江戸時代初期の俳人、池西言水の名句「木枯しの果てはありけり海の音」の本句取である。言水の句の令和版。無味乾燥な街はどこまでも寒い。



パトカーの隠れてみたる十二月

久松久子

師走はみなさん急ぐから、事故が多い。だから隠れて捕まえる。「パトカーが見えてブレーキ十二月」ということになりがちだから要注意である。



毬栗を握ってみたいくなる衝動

赤瀬川至安

危ないのを承知の上で挑戦するものに、バンジージャンプやスカイダイビングがある。強くあらねばならないという深層心理からきているらしい。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

ミニスカートの挑発に遭ひ草虱 ・・・草虱てふミニストーカー	渡部美香
名も知らぬ人の熱弁新酒汲む ・・・熱血漢を酒の肴に	月城花風
髪切って想定外の愁思かな ・・・思い切つたにたちまち悔み	山本 賜
着ぶくれて段差もないのにけつまずく ・・・見られたかもと辺り見回す	青木輝子
そんなに急ぎ何処へ行く秋の蛇 ・・・穴惑ふにも時間制限	稲葉純子
国葬に政府が菊を買い占めて ・・・国葬のあと捨てられたと菊	伊藤浩睦
月食の再生待ちつ夜食かな ・・・メニューはおそらく月見うどんか	鈴鹿洋子
飼い猫に背中を向けて秋刀魚焼く ・・・可愛い猫と言つたは嘘か	白井道義
年齢も自慢のひとつ秋日和 ・・・誰でも持つてる取柄の一つ	大林和代
この世こそミステリーなる夜長かな ・・・小説よりも奇なる現実	岡田廣江
はらはらにハラハラとなり木の葉髪 ・・・シャンプーしすぎもハラスメントに	加藤潤子
文化の日慎太郎刈りで文化人 ・・・太陽族も今は昔に	金城正則
おせち料理の早割始まる神無月 ・・・おせち料理も手抜きをするか	佐野萬里子

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

廃屋は日翳りやすし蚯蚓鳴く	相原共良
柚子味噌のこげ香ばしいにぎり飯	相原共良
雲外蒼天杜の木立の秋を剃す	相原共良
返り花賞味期限は切れてない	青木輝子
末期水ビールだ酒だ山頭火忌	青木輝子
十月の空に輝く金斗雲	赤瀬川至安
秋刀魚食ふ不要不急のバーベキュー	赤瀬川至安
落葉掃く乱れし心静めむと	井口夏子
とまり木を探すカラスの秋しぐれ	井口夏子
汽車ぽっぽの旅懐かしや煙と汗	池田亮二
衣更え昭和の野暮が粋となる	池田亮二
サックスの外れし音や月見茶会	石塚柚彩
二日前Tシャツを着て今朝炬燵	石塚柚彩
得意日の十月十日雨となり	石塚柚彩
県民葬国葬密葬の秋	伊藤浩睦
論葬の喧嘩台なるうすら寒	伊藤浩睦
鶏頭や頭デッカチ哲学者	稲沢進一
影となり光となって吾亦紅	稲沢進一
マスクしてさらに無口に日本人	稲沢進一
秋月多忙よ皆既月食と惑星食	稲葉純子
おかつぱに枯葉風の置きみやげ	稲葉純子
栗ご飯碗の真中に大き粒	井野ひろみ
老二人月食眺めくしゃみかな	井野ひろみ
庭手入れ住職忙し神の留守	井野ひろみ
栗ご飯炊けて炊飯器は宝箱	上山美穂
腫れた歯肉を痛がらせてるきのこかな	上山美穂
仏像は美術館の旅天高し	上山美穂
秋の暮秋刀魚のかたちの雲流れ	梅野光子
お散歩や金木犀の香をぬけて	梅野光子
食べながら歩き久々の鯛焼を	梅野光子
冬日和活を入れるや断食で	遠藤真太郎
雪女郎都市伝説の裏調査	遠藤真太郎
ボーナスはポケットブルな裏通り	遠藤真太郎
青空も狙っているよ柿の艶	大林和代
秋まつり事務所本部は駐車場	大林和代
純白の夢かと思ふ胡蝶蘭	小笠原満喜恵
繕ひはパッチワークよ秋の夜の	小笠原満喜恵
家族らの視線を集め松茸土瓶蒸	小笠原満喜恵

小春日の文字に眩い意志をよむ
 砂浜の子はクッションと冬の海
 はばかりに入るも屁ばかり放屁虫
 谿紅葉見よか焼き餅食べようか
 師走の日ゆるりと歩き挙動不審
 国際便何が何やら去年今年
 息しろし髭もしろし名はひろし
 玄関を出る白い息も出ている
 文化の日自死者三万文化の日
 七輪でパタパタ扇ぎさんま焼く
 隕石の一つは投石冬初め
 久しぶりとマスクを取れば他の人
 見つめられ少し痩せたか名月よ
 菘耳(おなもみ)の手りゅう弾なら受けてやる
 酔芙蓉熟女の色へまつしぐら
 茶の花や所詮茶番の金の蕊
 真っ先に耳から噛られ葡萄パン
 十三夜マクドナルドを出で見上ぐ
 インフルエンザ新型コロナに株取られ
 かたつむり抜菜洗えば浮いて出て
 入り口の菊人形もマスクして
 少年のお宝探し飛蝗飛ぶ
 豊の秋妻と肥ゆる犬ゴン太くん
 塩むすびラップに包み鰯雲
 勲章がまづ目に浮かぶ文化の日
 カメラから鳩が出るよと七五三
 日向ぼこあれこれそれで分かり合ふ
 蜘蛛は巣をゆらす親子が生きるため
 飛行機雲高枝鉄でつかもうと
 秋をかき集めてアリみたいだ私
 採れたてを茹でて食べたい落花生
 老いとぼけ交つてをりし敬老日
 大好きと云ふ人もをり死人花
 月白や手酌の酒は三杯目
 秋の雷神の如雨露で雨となり
 帆掛け船乗れば出雲よ神渡し
 五日ぶりの快便であり文化の日
 それぞれに渾名をつけて花梨の実
 挨拶もなく凧一号やって来る

岡田廣江
 岡田廣江
 加藤潤子
 加藤潤子
 北熊紀生
 北熊紀生
 木村 浩
 木村 浩
 金城正則
 金城正則
 久我正明
 久我正明
 久我正明
 久我正明
 工藤泰子
 工藤泰子
 工藤泰子
 桑田愛子
 桑田愛子
 佐野萬里子
 佐野萬里子
 壽命秀次
 壽命秀次
 壽命秀次
 白井道義
 白井道義
 鈴木和枝
 鈴木和枝
 鈴木和枝
 鈴木和枝
 高須賀溪山
 高須賀溪山
 高須賀溪山
 高田敏男
 高田敏男
 高田敏男
 高橋きのこ
 高橋きのこ
 高橋きのこ

ものぐさのなれの果てかな残り鴨	竹下和宏
妖怪の往来闊歩マスクの世	竹下和宏
栗むくや包丁で手を切らぬよう	田中 勇
老人のほほえましきや秋うらら	田中 勇
敗荷(やれはす)や華やかなりし過去を秘め	田中 勇
湯たんぽの火傷の痕も楕円形	田中やすあき
子の名前なんと読むやら蜜柑食ふ	田中やすあき
北塞ぐ斜に構えたる釘ばかり	田中やすあき
秋深しゴルフのパター特訓中	谷本 宴
腰痛で魔女歩きする银杏枯る	谷本 宴
もぞもぞと二度寝三度寝秋寒し	谷本 宴
松手入おへて見上げて変化なし	田村米生
穴に入る蛇うらやまし間借り人	田村米生
雑踏にひとりとなりて無事帰宅	田村米生
蜚蜚やまともな人生とは何ぞ	月城花風
何もかも価格改定蛇穴に	月城花風
秋麗やゴーツー企画の老齡者	土屋泰山
龍田姫志茂田景樹とお友だち	土屋泰山
猪のごと打ってくるミサイルを	土屋泰山
柿落葉花瓶の横に蘇り	長井知則
散るを待ち桜紅葉は艶を増す	長井知則
冬装備すれば夏日が戻り来る	長井知則
神山をなめつくしたる秋夕日	名本敦子
島陰に釣舟ひとつ小春風	名本敦子
埒もなきテレビみてゐる文化の日	名本敦子
一碧の空揺るがせり威銃	西野周次
長き夜を中島みゆき小椋佳	西野周次
充電も放電もして日向ぼこ	西野周次
百年の洋館包む空高し	花岡直樹
注ぎ方に凝ってビールの秋深し	花岡直樹
へうたんを愛づくびれなき女人かな	浜田イツミ
栗おこは苦手といつもいふをどこ	浜田イツミ
孫に嫌はる蝗食べたる話して	浜田イツミ
コロナ菌居座ってゐる神の留守	久松久子
忽然と現れふっと消ゆ曼珠沙華	久松久子
冬めくや雲の輪郭かたくして	日根野聖子
くるぶしの心細さよ冬めけば	日根野聖子
ロボットの応答すらすら冬うらら	日根野聖子

円安は他人事なり秋の旅	細川岩男
ジビエにせむ実りの秋を荒す奴	細川岩男
憎らしい秋の味覚を盗る輩	細川岩男
俗名はいろいろですが曼殊沙華	南とんぼ
敬老日傘寿はそこそこ前頭	南とんぼ
いつ死んでも良いと言いつつ惜命忌	南とんぼ
枯蓮や大河ドラマは修羅に修羅	峰崎成規
釣瓶落しタワーを夜が駆け上る	峰崎成規
空耳か狐火コンと鳴いたよな	峰崎成規
冷まじき元気のびんた猪木逝く	椋本望生
かくかくとゆきてしかじか秋遍路	椋本望生
夜食喰ふ数式Yを待たせつつ	椋本望生
敬老日老いの気骨を煙たがられ	村松道夫
梅雨の日に傘差して水かけて居り	村松道夫
飛蝗とぶオリンピックなら金メダル	村松道夫
焼き芋の旨さねつとり語るる	森岡香代子
秋の風せかされせまる知らぬ風	森岡香代子
裸木となりて古傷目立ちおり	森岡香代子
変色をしたと誤解されてる枯蠅螂	八木 健
小春てふ愛らしき名の陽だまりに	八木 健
ちに濁点紅葉は血の色してるから	八木 健
飼い主に似てきた秋の金魚かな	八塚一青
ありますかどこかに木の実交換所	八塚一青
破れても取り繕わぬ芭蕉かな	八塚一青
食欲の自動ブレーキ大マスク	柳 紅生
林檎剥く地球手玉に取るやうに	柳 紅生
六方の片足得手の菊人形	柳 紅生
初生りの及第点の林檎落つ	柳村光寛
見よがしに優雅に飛来小白鳥	柳村光寛
天気図が雪の坩堝(るつぼ)は直ぐと告ぐ	柳村光寛
終の花のかをりや友来たる	山岡純子
神様にお休みいただく秋土用	山岡純子
月を喰う天体ショーと冬羽織	山岡純子
姿なき鈴一行(いっこう)や遍路虫	山下正純
遍路虫鳴いて一行ほんに一行	山下正純
遍路して鈴を鳴らすや秋の虫	山下正純

古民家のランチに秋のうららかな

爺ちゃんの好物だった蜂屋柿

文化の日平凡な私がここに居る

とじた扇の形のこの虫って何

冬日さすよそのお宅の新築に

滋養食オクラとろろのねばねばは

ばっさりと庭木断捨離うろこ曇

文化の日日向のにはほひの綿ぶとん

大きな尻をひこばえの切り株にどっこいしよ

干柿のオブジェ一つが卓上に

銀杏の黄平和通りを塗り替える

老二人密談めくや日向ぼこ

群れたがる蟻に患ひ一つなき

愚痴るまい飼へば泥鰻も立ち泳ぐ

老木の熟睡まちか棟(おうち)の実

行く秋の古い書類をまとめおく

秋深む子離れといふ大事業

不揃ひの零余子の踊るフライパン

敬老日くじ羊羹に凶の無し

山田真佐子

山田真佐子

山田真佐子

山本 賜

山本 賜

横山洋子

横山洋子

横山洋子

吉川正紀子

吉川正紀子

吉川正紀子

吉原瑞雲

吉原瑞雲

吉原瑞雲

渡部美香

渡部美香

和田のり子

和田のり子

和田のり子